

# 宗教的方法の問題

(序 説)

久松 眞一

宗教的方法とて宗教科學的方法ではない。兩者は判然と區別されなければならない。後者は、宗教史學、宗教心理學、宗教社會學、宗教民族學、宗教現象學、宗教哲學等のやうに宗教を所謂科學する方法であるが、前者は、祈禱するとか、神を信仰するとか、止觀や阿字觀を修するとか、念佛するとか、坐禪するとかいふやうに宗教する方法である。科學する方法によつて宗教を科學する人は宗教科學者であり、その目的は宗教に關する科學的知識を得るにあるが、宗教する方法によつて宗教する人は宗教者であり、その目的は宗教的體驗を獲るにある。兩者が混同されると、一を得て他を得たるかの如く、又一を得て他をも得たるかの如く錯覺したり、或は各各その目的を達することができなかつたりするのである。佛敎教團に於て、只單に佛敎に關する科學的知識だけしか持たない佛敎科學者が佛敎者の如く錯覺されたり、又佛敎の教育機關に於て、佛敎に關する科學的知識を授けることによつてのみ佛敎者を育成しようとしたりして居る如きは、この兩者の認識不足に因るものといはなければならぬ。佛敎の今日の不振には、勿論他に色色の原因もあるが、この認識不足が演じた役割は決して小さいものではない。何よりも佛敎者を育成することを第一義としなければならぬところの佛敎の教育機關に於て、明治以來科學的方法による佛敎科學が重視せられ、宗教的方法による佛敎的體驗が輕視せられ、もしくは無視されて來たことは、本末顛倒であつて、佛敎を衰微せしめる大なる原因になつたことは當然のことといはねばならぬ。かくいへばとて私は、佛敎科學を否定しようとするものでも

なければ、無用視しようとするものでもない。佛教科學は、科學の、特に宗教科學の重要な分野として、それ自身に科學的獨立性を持つのみならず、佛教的體驗面にも助縁的效用をなすものともいはるべきである。随つて佛教の科學的研究はますます廣く深くなされることが要望されるのであるが、それにも拘はらず、宗教としての佛教に於けるその重要さは、第二義的であるといはなければならぬ。今やわれわれは「八萬の法藏をしるといふとも、後世を知らざる人を愚者とす。たとひ、一文不知の尼入道なりといふとも、後世をしるを智者とす」といふ一枚起請文のかの有名な句や、「今時の人只多知多解を得んと欲し、廣く文義を求め、喚んで修行となす。知らず、多知知解翻つて壅塞と成ることを」といふ傳心法要の語を再確認すべきである。洵に、いかに梵漢の大藏を科學的に知り盡し、廣汎なる知解を得るとも、佛教に取つては本質的には枝葉の事たるに過ぎない。佛教に限らず、凡そ宗教のレーゾン・デュ・トルが、科學されることにあるのではなくして、宗教されることにあるといふ自明の理を、われわれは今更ながら力説し、その本來の使命を全うせしめなければならぬ。それには何よりも先づ宗教的方法を重視強調し實踐しなければならぬことは當然なことである。

かやうにいへば、恐らく基督者は、祈禱とか神信仰とかを、佛教者は、止觀とか念佛とか坐禪とかを宗教的方法として實踐せしめようとするであらう。これ等は、幾百、幾千年來の傳統を有つ宗教的方法であるから、さう考へられるのは一應尤のことといはなければならぬ。現代は、これ等の宗教的方法が或は過去の遺物と化して全く行はれず、或は輕視されて實究されないために宗教が不振であるともいへるのであるから、これ等を復興し強調することによつて宗教の興隆を企てることも十分に領かれることではある。宗教の衰微を憂ふる人又は時代が、いつでも僧風教育や僧堂教育を力説するのはそれが爲である。現今の佛教諸宗派中、恐らく臨濟禪ほど宗教的に生きて居る宗派は他に見られないであらうが、それは他宗派がその教育機關に於て普通學や佛教科學に専念して僧風教育を閑却して居る時代に、臨濟禪が獨り全國二十餘の專門道場を護持し宗教的方法によつて佛教を宗教して來たが爲である。随つて宗教の

興隆には、宗教的方法が實踐されなければならぬことは必極の條件ではあるが、しかしその方法が果して從來のまま  
でよいかが問題である。

われわれは前に、宗教の衰微が宗教的方法の閉却に因るところ大なるものがあることを考察したが、しかし又逆  
に、宗教的方法そのものが形式化してしまつたり、或は時代に適應しないものになつてしまつたりして、最早役に立  
たなくなつた爲に宗教の衰微を來すこともあり得ることを忘れてはならない。もしも宗教的方法の方に何等の缺陷も  
ないのに拘はらず、單なる認識不足や不精進のために宗教的方法が閉却されて居るのならば、それを復活昂揚するこ  
とは是非ともなされなければならないことであるに相違ない。しかしその方法が最早役に立たなくなつて居るに拘は  
らずそれを看破し得ずして、或は惰性より、或は因襲の盲信より、その方法を固執しようとするならば却つて逆効果  
を生ずることになるであらう。それであるからわれわれは、宗教的方法を閉却する認識不足と不精進とを反省すると  
同時に、宗教的方法そのものの適格か否かを批判檢討することを怠つてはならない。因襲に泥み安んずるものは信あ  
れども批判なく、新しきを逐ふものは批判あつて信なきが常である。批判なき信は盲目であり、信なき批判は不實で  
ある。凡そ何事でも傳統に生きるものには兎角批判がない。宗教家も多分にその例に漏れない。疑はず、批判せぬ  
のを信とさへ思つて居る。疑ひ、批判するものを危険視して、危険視することの却つて危険なることを知らない。疑  
ひを極め、批判を盡すことを眞信への前提でなければならぬ。大疑の下に大悟ありといひながら、脚下の實地を疑  
ふことを忘れて安易なる夢を食つて居る。疑ひや批判を放棄したり、忘れたり、恐れたり、禁じたりするところには  
發展もなければ應機性もない。信仰とは疑はぬことであるとの宗教的觀念のはきちがへが、從來どれ程人間の進歩を  
阻み、宗教自身の發展をさへも妨げて來たかも知れない。信仰とは與件を只鵜呑みにすることではない。信仰は自己  
批判を極めるとともに、一切の現象を根本的に批判する能動的積極的なものでなければならぬ。然るに、今日の信  
仰は自己批判もなければ、況して他を批判する能力もない。それどころか却つて他から批判される受動的狀況に置か

れて居る。時勢はすでに宗教に對し、批判を越えて否定にまでも進んで居る。かかる現状に於て、宗教家はなほも因襲を墨守し、無批判で居ることができらうか。宗教は先づその從來のあり方に對してあらゆる面で自己批判を迫られて居る。各宗各派に於て、それぞれ神聖にして不可犯とされて居る宗教的方法も批判を免れることはできない。否今や、各宗派に於て自ら徹底的に自らのあり方を批判し検討すべきである。さうすることこそ却つて更生安定の方途である。しかしいかなる立場から批判し検討すべきであるか。

もとよりそれは、宗教的方法の目的に取つて、本質的ならざる外面的な立場からなすべきでないことはいふまでもない。宗教的方法が宗教する方法であり、人を宗教的にする方法である限り、その方法が果して人を眞に宗教的にすることができるか否か、が批判の標準でなければならぬ。例へば、現行の念佛や坐禪の批判は、それ等が、單に既成の特殊な淨土教的或は禪宗的に人をなし得るか否かによつてなされるのではなく、更に一步進めて、一般的に佛敎的に人をなし得るか否かによつてなされるのではなくして、既成の宗教に拘らず、眞實の宗教的に人をし得るか否かによつてなされなければならぬ。もとより念佛や坐禪は、先づ第一には、眞に人を淨土教的或は禪宗的にし得るか否かによつて批判される筈のものではあるが、然し人を眞に佛敎にするには念佛がよいか、坐禪がよいか、何れがよいかといふ二者擇一の批判になつてくると、もはやその標準によつては批判されることはできなくなる。それらが何れも佛敎である限り、その批判は、その二者の中何れが人を眞に佛敎的にし得るかによつてなされねばならぬ。それ故既成の佛敎諸宗派に於ける特殊な佛敎的方法是、何れが人を眞に佛敎的にし得るかによつて批判されなければならぬし、もし既成の方法に妥當なものがないならば新しく建立されなければならぬ。これ即ち、佛敎史上にも所謂敎相判釋と立敎開宗の存する所以である。敎相判釋は既成佛敎或は佛敎の現狀に對する根本的な總批判であつた。それだけに、判釋には、佛敎の既成のあらゆる敎相の認識と、敎相の批判力と、新しき敎相の創建力とが兼備されねばならぬ。しかのみならず、佛敎が現實の衆生の濟度を目的とする限り、批判と建立には現實の衆生の

機(き)の廣く深き洞察が重要な契機(き)とならねばならない。今日、佛教内に於ける佛教の自己批判はかやうな教相判釋(けさうはんげつ)でなければならぬ。そこで初めて佛教の科學も、更には餘他の諸科學も教相判釋には不可缺なる契機として宗教的意味を持つて來るのである。

以上は、いかなる方法が眞に佛教的方法であるかの批判の仕方であるが、たとひさういふやうにして、その方法が眞に佛教的であることが確かになつたにしても、只それだけではなほ、それが眞に宗教的方法であるといふことがきまつたことにはならない。そこで、佛教の方法は、更にそれが人を眞に宗教的にすることができるといふことによつて批判されなければならない。そこで又、佛教といふ一つの特殊宗教内に於ける教相判釋ではなくして、佛教、クリスト教等の諸の特殊宗教を含む一般宗教内での教相判釋がなされなければならないことになるのである。この判釋によつて始めて眞實の宗教的方法が確立されることになり、特殊宗教内での宗教改革ではなくして、宗教一般の宗教改革がなされるのである。今日(こんにち)はもはや、眞の宗教的方法は、人を眞に佛教的にすることができるといふことによつても、亦クリスト教的にすることができるといふことによつても普遍妥當なるものとしてきめられることはできない。いかなる方法が、眞實に人を宗教的にすることができるといふか。この方法の建立こそ即今宗教家の焦眉の大誓願でなければならぬ。然るにこの重要な問題が、遺憾ながら今日宗教家によつて自覺されて居らない。吾吾は宗教の復興と甦(よみがへ)るために、まづこの問題を提起し、高聲に宗教家の覺醒を促(うなが)さざるを得ない。併し更に進んで吾吾は宗教が何故に人間に取つて普遍的に必要なものであるか、既成宗教のどれも必要であるか、どれかが必要であるか、どれも必要でないか、たとひ既成宗教中には必要なものはないとしても、何か新宗教が必要であるのか、必要ならばそれはどんな宗教でなければならぬか、或は新舊を問はず宗教は一切必要がないのか、必要でないならばその理由はどうか、といふやうな問題を提起しなければならぬ。この問題は既成宗教のみならず宗教そのものの存在理由の問題であつて、その明確な解明なくしては宗教的方法の問題も十分に解明されることはできない。

(未完)